

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270202460		
法人名	医療法人社団平世会		
事業所名	グループホームひろた		
所在地	長崎県佐世保市広田1丁目4番7号		
自己評価作成日	令和5年11月12日	評価結果市町村受理日	令和6年2月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和5年12月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設から今年で19年目を迎え、入居者の重度化に伴う医療的ニーズが高まる中で、昨年度より看護師を配属して経営母体の村上医院との連携をより密に図りながら、重度の方も安心して継続利用ができる体制を整えてきた。コロナ5類へ移行してからは、外出支援や面会対応も徐々に緩和され、入居者及びご家族にも楽しみが増えて多くの思い出が作り出せていると思う。

毎年実施している中高生のインターンシップや短大の実習の受入れは、入居者の生活に活気をもたらすと共に、職員にとっても指導をする傍ら介護の魅力も伝えているように、襟を正す意味で各自のスキルアップにも繋がっている。

運営に関して、これまでは一部管理者任せの部分があったが、現在は後任の育成も含めて、主任を中心に業務の見直し等を行っている所であり、さらに充実した体制作りに向けて職員一丸となって取り組んでいる。

ホームは母体医院の近隣にあり、通所リハビリテーション、デイサービス、居宅介護支援事業所を併設している。建物の2階及び3階にそれぞれユニットがあり、各ユニットの持ち味を生かした取り組みが窺える。2年程前に現理事長が就任後、時流に応じた運営や方針を取り入れ、職員意識の向上に繋がっている。管理者は主任を始めとして職員が自主的に従事できるよう指導内容を変更し、スキルアップや業務改善に繋げている。令和4年より介護ソフトの導入をして業務の効率化と標準化を進めており、ホーム全体に浸透を図りながら今後の入居者への良質なサービスを提供するなど、更なる体制作りを期待が持てるホームと言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の言葉の意味を要約し職員間で共有し実践できるように掲示し、日々感謝の気持ちを忘れずに努めている。	朝、夕の申し送り後に必ず理念を復唱し、言葉の一つ一つの意味を理解し、業務や支援に繋げている。	理念の下、職員が「自分ができることは何か」を考え、個人目標を立てて偶数月に自己評価と、12月には目標の達成度を確認している。上司の指示を待つのではなく、自発的にできることを考え、介護の質の向上に繋がるよう取り組んでいる。絵が得意な職員は、入居者とともに作品作りを行う等、自発的に役割を果たし入居者と笑顔での関わりに繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍にて地域との交流機会は実情行えていないが、外来患者の方や施設周辺の散歩などで近隣の方々と日常的に挨拶を交わしている。	コロナ禍の影響もあり、地域の行事に参加できない事も多かったが、今回初めて近隣地域のお祭りに作品を出展し参加する事ができ、久しぶりに地域との繋がりがもてるようになった。	地区担当の生活支援コーディネーターからの案内があり、令和5年11月に広田地区公民館主催の「ふるさと祭り」へ、併設のデイサービス利用者と共に入居者の作品を出展した。出展したことにより地域にホームを知ってもらう機会となった。今後、介護・医療の専門性を生かして地域に向けて介護教室を再開する意向である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年、介護系短期大学の学生の実習や、地域の中学生の職場体験学習を受け入れている。指導を通して認知症ケアや介護技術、介護の楽しさなどを伝え、介護に興味・感心を高めてもらうよう介護人材の育成にも心掛けている。 今年度、元実習生が入職し活躍している。	コロナ禍であった為介護教室などは行えていないが、毎年、短大の実習や中高生のインターンシップを受け入れ、認知症ケアや支援・技術などを指導する事ができている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年7月より、運営推進会議を書面方式から従来の参加型に戻して開催している。 毎月の活動時の写真を掲示する事で、委員の方々やご家族より「入居者の楽しんでいる様子が見れて安心した」との意見を頂いた。	昨年度までコロナ禍にて運営推進会議は書面での開催だったが、今年度の第2回目より対面での会議となり、初めて会議に参加されたご家族に対して、施設内での活動報告や入居者様の様子等の報告を行い、いろんな意見を頂いた。	運営推進会議は令和5年7月より対面会議を再開し、それに伴いこれまで参加したことがない家族にも参加を呼びかけ、家族や他メンバーにより活発な意見交換ができています。会議はホームの取り組みやヒヤリハットとその対策についても報告し、各メンバーからの意見や質問に応じています。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	管理者が窓口となり行政担当者との連絡調整を行っている。また市のグループホーム連絡協議会の役員を担っている関係で、必要に応じて行政への要望などを伝えたりしている。	管理者が窓口となり行政担当者との連絡調整を行っている。	管理者は運営推進会議メンバーである市長寿社会課職員との情報交換や、関連する法改正など事前に情報収集し、必要に応じて主任と共に同行して説明を受けている。ホームの見学依頼には円滑に対応できるようにしている。社会福祉協議会の自立支援事業である入居者の金銭管理や成年後見制度利用等、関係機関と連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在身体拘束を行っている事例はないが、やむを得ず身体拘束を行う場合は、指針を基にご家族に説明を行い、同意を得た上で期間を決め対応している。期間中は定期、又は必要に応じて見直しを行い、解除に向けたケアの実践に取り組んでいる。運営推進会議内でも委員会を設け、事例有無関係なく議題の1つとして毎回協議している。	現在該当者はいらっしゃらないが、運営推進会議の際に身体拘束等適正化委員会を同時開催しているので、日々の支援や介護に関して見つめ直す機会となり、身体拘束をしないケアの実践に取り組んでいる。	ホームは運営推進会議メンバーにより構成する身体拘束廃止委員会や虐待防止委員会を定期的に開催している。同法人の権利擁護指針に基づき、職員への意識づけとして各部署にコンプライアンスルールを掲示し、職員は身体拘束や虐待に該当する行為について意識を持って日々の支援に従事している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の事例はないが、各フロアにコンプライアンスルールを掲示し、職員間で虐待防止の徹底に努めている。8月に市主催の高齢者虐待防止ネットワーク検討会に参加しレポートを提出。参加していない他部署や自施設の職員もいるのでレポートを回覧し学ぶ機会を作り出している。	昨年より看護師が配属となり、客観的な目線での気づきを介護士と共有できるようになり、今まで以上に虐待防止の意識は高くなったと思う。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在1名の方が成年後見人制度を利用されている。後見人よりお小遣い・預かり金分の現金出納帳の内訳や、領収証コピーの依頼があった際は対応している。	現在、社協のサポートセンター介入で金銭管理をして頂いている方がいるが、今後は成年後見制度に移行する予定なので、学ぶ機会も増えてくると思う。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設見学や入居相談は現場職員も対応し、契約は主任が窓口となり、分かりやすい言葉で説明をするように心掛けている。 また改定の際は、管理者が作った改定内容の文書と同意書を基に、全職員が理解した上でご家族へ説明同意を得るようにしている。	管理者もしくは主任が契約に関する説明を行っているが、その内容に関しては特定の職員だけで行うのではなく、どの職員でも理解をし、いつでも対応が出来る様になれば、ご家族も安心していつでも尋ねる事が出来ると思う。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会の際は入居者の生活面など近況報告を行い、内服薬の変更や定期健診の結果などは適宜説明をしている。 入居者やご家族からの意見や情報などは申し送りで報告し、記録に残して共有をしている。	今年度2回目の運営推進会議より対面での会議が再開となり、各ユニットの入居者家族にも出席してもらい、直接意見を頂く機会が増えて運営に反映できるようになったと思う。	家族の多くは医療費の支払い等でホームに訪れ、その際に職員がホームの現状を報告し、家族の要望を聞き取った後職員全体で情報を共有している。運営推進会議が対面開催となり、家族へ参加を呼びかけ、その際に各家族より意見を聞き取ることができている。今後も家族参加の呼びかけを継続する意向である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から業務面・設備面・備品など管理者が窓口となり現場の意見を反映してもらっている。	現場の意見等は意見箱等も活用しながら主任に伝達したり、内容等によっては主任が管理者へ伝えている。また、3ヶ月毎に開催する主任会議には、併設事業所も参加し、理事長、管理者同席の下で、各事業所からの報告のほか、課題や提案事項等を協議して全体で共有することができている。	職員向けの意見箱を設置している。また、3か月ごとに法人全体で開催する主任会議では、定期的に行っている各ユニット及び全体会議の内容等を報告することにより法人全体に職員意見の周知を図っている。職員意見を反映した事例として、現場を離れ確実に休憩時間を確保することや、定時に職務を終了する体制がとれるようになった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者より出勤時の検温で37度以上ある場合や、熱がなくても体調不良がある場合は出勤しないよう指示があり、感染防止と職員の健康状態を考慮して、家庭と仕事の両立ができる環境作りに努めている。現場でも休憩時間の確保や定時退社を心掛け、全職員で意見を出し合い取り組んでいる。	介護ソフトの導入や委託業者からの配食、看護師の配属によって職場環境は格段に変わった。時間にもゆとりが持てるようになり、入居者と関わる時間も作り出せている。 「今の自分にできる事は何か？」を各自が考え実践する事で、スキルアップの意識が感じられるようになってきた。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者が各事業所に職員研修(必須)資料を配布し各自で学習している。GH連絡協議会主催の研修会の他、外部研修などの案内は随時管理者から提示され、勤務体制に無理のない範囲で参加している。提出したレポートは各事業所に回覧され内部研修として学んでいる。また、GH内で喀痰吸引等の実地研修を行い、各自スキルアップに努めている。	今まで職員は受け身の研修が多かったが、昨年より希望する研修の選択が活性化して、より学びたい事柄に目を向ける機会が増えてきた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナが5類となりGH連絡協議会の研修参加や東部ブロック研修会(年2回)等、少しずつ他施設の職員との交流も増えてきている。 東部ブロック会議も主任が参加し、他施設の管理者等との意見交換の内容を現場に持ち帰りサービスの質の向上に役立っている。	コロナ禍の中、これまで他施設の方との交流する機会が持てなかったが、現在では規制も緩和され、施設間の意見交換や勉強会の機会を取り戻すことができ、改めて協議会等のネットワークを活かした活動が、自施設のサービスの質向上に繋がるものと感じている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設見学や入居相談時に、可能な範囲で情報の聞き取りを行ったり、予め担当ケアマネからの情報を基に、本人とご家族から現在の身体面・生活面の状況や課題点などを抽出し、安心して入居できる準備を心掛けている。	コロナ禍で事前訪問ができずインタビューも不十分な所もあったと思う。特に医療機関からの入居の場合、看護師との電話での聞き取りによる情報のみで、直接本人との面談が叶わなかったため、意向等も確認できぬまま入居されることもあった。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前情報の他、契約時に再度ご家族の思いや要望などを聞き取り、入居者の新しい生活に具体的に反映できるよう努めている。 普段から全職員がご家族と関係が築けるよう積極的に関わりを持つよう意思統一を図っている。	事前の申し込みの段階で、ご家族より困っている事や不安な事などの相談を聞き取るようにし、入居してからの支援に繋げる事ができるよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の情報を基に入居後の生活の様子や本人の言動や表情、しぐさなど照らし合わせながら「その時」に適した対応ができるよう、本人の意向と日々の申し送り等を確認しながら、個別ケアに繋がるよう努めている。	コロナ禍に新規入居された方は、事前面談で不十分な点があったと思うが、可能な限り必要としている支援を見極め、本人もご家族も安心できる環境作りと、適切な介護サービスの提供ができるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の生活歴や身体面などの情報を基に、可能な範囲でお手伝い等を一緒にして頂きながら、「できる事(長所)」を生活に反映できるように努めている。 特に貼り絵などの作業を行う際はレイアウトや色彩等を入居者と相談しながら一緒に考え作成にあたっている。	1人1人のできる事を見極めてお盆拭きや食器拭き、洗濯物たたみ等のお手伝いを依頼している。 入居者同士、または職員も入って互いに協力し合いながら、共に支え合う関係を大事にしながら実践している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事の際は、その様子を撮った写真を掲示し、面会時には写真を通して日頃の生活の様子等を伝え、その際にご家族の意向も確認しながら双方の関係を大事にしている。 また、他医療機関受診の際はご家族に連絡し同伴をお願いしている。	コロナ禍の影響でご家族との面会も大きく制限されている状況だったが、やっと面会に関してルールも緩和しつつあり、ご家族と触れ合う時間と共に、互いの笑顔も増えてきたと思う。ご家族も外出を検討されたり、足のマッサージをしたり、本人が好む食べ物を持参して下さるなど、共に支え合う関係性が築けるようになってきた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	定期的に知人の方が面会に来られて、職員とも顔馴染みの関係が築けている。 入居者の中に姉妹が併設のデイケアを利用されている方がいて、利用日に合わせて面会に来られ絆を深められている。	規制が緩和され行きつけの美容室に久しぶりに行かれたり、併設のデイケアの利用者(友人)が会いに来られるようになった。 数年ぶりに早岐茶市に行き、懐かしんでおられる方もいらっしゃった。	在宅時から送迎付きの美容室利用を継続している入居者が、外出の緩和により馴染みの美容室を利用できるようになった。また、併設デイケアの利用者の友人が手作りカレンダーや、以前の写真をまとめた手作りアルバムを持参する等、馴染みの関係継続を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食卓の各座席が「自分の居場所」と認識されている。食事前には、入居者の1人が手指消毒担当になり、他入居者に声を掛けて手の消毒を促されている。必要に応じて職員が介入し、入居者同士の関係性を保っている。	レクや作業等は、入居者全員に声をかけて参加を促している。コロナ禍でマスク越しでの会話や、ソーシャルディスタンスを取るなど不便をかけている部分もあるが、入居者同士の交流が続けられるよう取り組んでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	村上医院の待合室や外出先でご家族とお会いした際は、挨拶や言葉を交わすなど交流は続いている。	サービス終了した後は関わる機会が少ないが、外でお会いした際は挨拶を交わしたり近況を伝えあったりして、これまで築いてきた関係性が途切れないように心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者との会話の中で、本人の希望等を確認した時はその想いを尊重し、本人とも相談しながら実現に向け取り組んでいる。その際はご家族とも共有して、協力が必要な時はお願いしている。	在宅生活時のベッドの位置や向き等を聞き取り、居室の環境を整えたり、膝が悪くても可能な限り自分の足で移動してトイレに行く事ができるように、居室やトイレの場所等も考えながら支援している。本人に直接尋ねる事もあるが、日常の会話の中から思いや希望をくみ取りスタッフ会議で検討したり、ご家族にも相談している。	職員は入居者との日頃の会話や表情より思いや意向を汲み取り、内容によってはケアプラン作成時に検討している。家族の面会時に対応した職員が、入居者がホームでどのような生活を送ってほしいかを聞き取り、内容を個人記録やiPadに入力したり、朝夕の申し送り時に報告し、全職員で情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	施設見学や入居相談、入居契約時に現状や生活の様子、課題などを本人やご家族との面談を通して状況把握をしたり、担当ケアマネや主治医からの情報提供等も照らし合わせながら、入居後も不安なく生活を送れるよう努めている。	衣類や寝具のこだわり等は個々で違いがあるので、本人の希望や入居する前の情報をご家族から収集している。ご自身の携帯電話で、毎日ご家族と会話をしている方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	当事業所の看護師を中心に、朝から入居者1人1人に体調を尋ねたり、朝・夕の申し送り時に生活チェック表や介護記録を基に健康状態を把握し、その時の状態に適したサービスを提供できるように努めている。	介護ソフトの導入を機に、記録も簡素化され読み易くなり把握もし易くなった。今後は、どの項目に何を記録すべきなのかをユニット間で工夫し統一する事で、互いのフロアの状況や入居者の状態が把握しやすくなるなど、ユニット毎ではなく、グループホーム全体で支援できる体制を目指したい。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	事前検討用紙やフロア会議、申し送りなどで職員の意見を収集し、主任や職員間だけでなくご家族とも面会時に意見交換しながら無理のない実現可能な介護計画を作成するように心掛けている。	カンファレンスに直接ご家族が参加されることはないが、面会時にご家族へ要望を聞いたり、本人の意向や現状を確認しながら、可能な限りお一人お一人の生活に反映できるように努めている。日々の生活の中での課題や支援方法の統一すべき点など、申し送りやフロア会議の場で意見を出し合い、入居者の現状に即した介護計画を作成している。併せて、ご家族にもリスク面も把握してもらえよう報告している。	職員が各入居者を担当してカンファレンス前にアセスメントし、長谷川式認知症スケールの実施、入居者についての気付き等の記録を担当している。ケアプラン見直し時や変更時の1か月前に職員は各自が事前検討用紙に必要事項を記入している。カンファレンスで入居者の現状に応じ達成できる目標を設定し、職員の統一したサービス提供に努めている。	介護ソフト導入後、3階ユニット職員の意識変化があった。数名の入居者が継続して同じ部位に内出血等があったため、介助時に観察し、原因となった場所を特定し、人間型図に外傷や内出血箇所を記して経過観察するシステムを構築、介護ソフトに入力するヒヤリハット件数が月30件程に増え事故防止に繋がった。今後、3階ユニットだけでなく、2階ユニットにも成功例を取り入れ、ホーム全体で標準化し、事故防止に繋がる支援に期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	昨年11月から介護ソフトを導入し、i-padでの操作となり以前の手書きと比べて記録の一元化に繋がっている。ケース記録や入居者に関する職員間での申し送り事項など、些細な気付きも記入し日々の申し送りなどで確認し合いチームケアに努めている。	介護ソフトを導入した事により記録に要する時間が短縮し、写真の添付も併せて伝達のツールとして効果がある一方で、記述が定型文化していたり、システムに不慣れな部分等もあるが、口頭での申し送りや会議時に補足的に確認し合いながらケアの見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に見えるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	職員不足でシフトに影響が起きそうな時でも互いのユニットで協力し合い、勤務体制を見直しサービスの維持に努めている。コロナ禍の影響で、従来の併設事業所との交流も途絶えていたが、今年度よりその体制も戻りつつある。	併設事業所との交流や関わる機会などはほぼないが、以前は互いに協力し合い連携を図っていた。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の中学校の職場体験学習や短大生の介護実習を毎年受入れ、入居者の生活面にも活力を頂いている。 また11月開催の地域の文化祭に貼り絵の作品を出展する予定で、地域の方々と交流できるのを楽しみにしている。	コロナ禍で地域との関わりがあまりないが、中高生のインターンシップや短大の実習受け入れは現在も継続しており、入居者だけでなく職員にも良い刺激となっている。他に近隣の行きつけ美容室とも関わりを続けている。 今後、規制緩和により徐々に地域との交流の場を作り出すことで、入居者が生き生きと楽しみを持つことができるようになると思う。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者全員、当院がかかりつけ医となっており、月1回主治医が定期診療に来られ状態変化の際も往診に見え状態把握に努められている。病状に応じて他の医療機関を受診する際は、当事業所の看護師または職員がご家族と同行するようにして情報を共有している。	母体の村上医院がかかりつけ医となっており、当事業所の看護師が当院と毎日連絡を取っており、医療と介護のより良い連携が入居者の健康管理に繋がっている。 他科受診に関しても、病状に応じて主治医が直接家族に連絡して受診を勧めている。	入居後は、母体医院を主治医として入居者は月1回の定期受診を行っている。母体医院の看護師と連携を密に図り、医療面での体制により職員は安心して介護業務に就くことができている。他科受診時はホーム看護師、職員が家族と同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	当事業所の看護師が介護職員と意見交換しながら、入居者の健康管理や薬の管理、当院や他の医療機関、そして薬剤師等と連携を取っている。看護師が休みの時は、当院の看護師とも情報共有しながら協力を得ている。看護師任せにならないよう、介護スタッフも医療的勉強会を行い知識を高めていきたい。	昨年8月より常勤の看護師が入職し、定期受診時の対応や急変時の対応なども母体医院と連携を取りながら入居者の健康管理を行っている。ちょっとした入居者の変化でも看護師へ相談できるので心強い。また主治医との橋渡しとなり、当院への相談等もしやすくなった。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	村上医院との連携の下で、入居者が安心して治療が受けられる体制が整っている。 入院された時は、定期的に医療関係者やご家族に情報を得るなどして、退院に向けた体制を整えるようにしている。	主に当事業所の看護師が窓口となり、医療関係者との協働体制が整っている。 当院入院時の担当PTより、退院後も施設内でのリハビリのアドバイスを受けることができ、入居者の生活動作の改善に繋がっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に看取りに関する指針を基に説明している。状態変化の際は、例えば主治医の指示の下、看護師が点滴管理を行うなど、主治医が早期にご家族に説明を行い対応をしている。重度化された場合も主治医、ご家族、当事業所と協議を行い、可能な範囲でご家族の意向に添う形で対応方針を決めるようにしている。	契約時に看取りに関する指針を基に説明を行い、状態変化や病状変化などあれば主治医とご家族と当事業所で協議した上で終末期対応を行っている。当事業所の看護師が、ご家族へ分かり易く説明を行い、病院との連携もとれチームで支援できている。	看取りに関する具体的方法を詳細に重要事項説明書に記載している。母体医院との連携によるホームでの看取りができる方針を入居時に説明し、支援を行っている。昨年から看護師が在籍しており、膀胱留置カテーテルが必要な入居者の受け入れも可能となり、入居者の症状に応じて点滴治療も実施している。入居時から終末期まで、主治医の指示の下、一貫した看取り支援体制を構築している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	秋に東部ブロック研修で東消防署にて救急蘇生法の講習会を実施したが、急変時や事故発生時の対応を全職員が適切に対応できるか不安はある。今後マニュアルの見直しや当事業所の看護師を中心に勉強会を行い急変時に備えたい。	吸引セットは各フロアに設置しており、消毒液の作り方や取扱い等を当事業所の看護師から指導を受けながら対応している。急変時などの対応は看護師が対応しているが、常にいる訳ではないので急変や事故発生時の備えとして、いざという時の為にシュミレーションや勉強会を行う機会を作り学ぶ必要がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	火災想定避難訓練を法人全体で年2回実施。防火対策として年2回の設備点検や年1回の防火対象物点検、自主点検や火気点検を行っている。現在BCP作成中ではあるが、今後BCPを基に訓練を計画的に行い、見直ししながら活かしていきたい。	年2回の消防訓練は実施しているが災害時の訓練は定期的にはできていない。現在、事業所内でBCP(事業継続計画)システムを作成中であり、これを基に緊急事態に備えた対応に関して、全職員が意識する良い機会となっている。	年2回、ホームや併設事業所を出火場所と想定し自主訓練を実施している。BCPを作成しており、職員の意識付けの機会となった。ここ数年、入居者と共に避難訓練ができていないことや有事の際の役割分担については全職員で検討し、明確にすることが今後の課題と言える。尚、BCPに沿った訓練について全職員で協議し、今後、訓練を実施する予定である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーの保護に関しての資料を基に併設の各事業所間で勉強会を行った。入居者は「人生の先輩」「自分がされて嫌な事(言葉・態度・表情・しぐさなど)は入居者に行わない」など改めて再確認をすることができた。入居者に敬意を払い、お一人お一人の思いや意見等を尊重し、不安やストレスを感じにくいような環境作りに取り組んでいる。	介護部全体でプライバシーに対する研修を実施し、ユマニチュードについても学ぶ機会を得る事ができた。人生の先輩であるため言葉使いなど気をつけているつもりが、いつの間にか入居者を傷つけてしまう言葉が出ているかもしれないので、改めて日頃の声掛けや言葉使い、口調、表情にも気をつけながら対応を心掛けている。	入居者に対する「プライバシーとは」について資料を併設の居宅介護支援センターから各部署へ配布し、資料を基に学んだこと、感じたこと等を全職員で考え、まとめたものを提出している。ユマニチュードについてリモートで外部研修を受けたり、東部ブロック9施設が合同研修を受ける等、職員は入居者の尊重とプライバシーの確保を意識した支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話をする時は、自己決定できるようお尋ねをして、その思いを引き出している。 入居者同士での会話や職員との会話の中で、本人の思いや要望などをくみ取り、申し送りなどで情報を共有して入居者視点での対応を心掛けている。	できるだけ自己決定できるよう普段から疑問形や選択肢を使って確認したり、何気ない日常会話の中で本人の思いや要望をくみ取り、職員間で情報を共有するように心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間を基準にして、1日の生活の流れ(日課)をなるべく崩さずに、その日その時の1人1人のペースに合わせて支援している。行事や業務の都合上、日課を変更する時は、事前に業務や勤務を調整し、入居者にも事情を説明し理解を得た上で対応している。	1日の生活パターンは可能な限り入居者に合わせて要望に沿えるように支援しているが、施設の日課に合わせた動きをさせてしまっている所は少なからずあると思われる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝及び入浴後に衣類の着替えを行い、自分でできる方は更衣後はカゴに入れて洗濯に出されている。離床後は整髪を心掛け、衣類汚染時はその都度交換している。衣替えの時期や衣類が古くなった時はご家族に相談し持参してもらっている。 訪問美容は定期的に依頼しカットしてもらっている。	朝の洗面時、車椅子の方でも鏡を見ながら髪を整える事ができるように洗面台に手鏡も配置している。自分でするのが困難な方は職員が髪を整えたり髭を剃ったりと、各自の身だしなみを整えている。 外出時やイベントの日などは前もって用途に合わせて衣装を選んで着て頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者・ご家族との初回面談時に嗜好を尋ね、その方の状態に合わせて食事形態を変えている。また、その方に合った食べられる適量での提供や持ちやすい器、食材が映える器の色等を考慮しながら食べて頂いている。また残存機能を活かした支援として、食事の盛り付けや下膳、食器洗いやお盆拭き等のお手伝いも生活意欲に繋がっているものと思う。	食事の準備や片付けは職員が行っているが、食器拭きやお盆拭き等は入居者にお手伝いして頂いている。おやつ作りでは入居者と一緒に準備して、各々で飾りつけ等してもらい、楽しんで頂けるように支援している。毎月の献立の中にご当地メニューや行事メニューがあり、季節感や特別感があり、毎回楽しみにされている。	入居者の嗜好や禁忌食を把握し、嚥下能力に応じたムース状のソフト食や食事で摂取できない入居者には栄養補助食品を提供している。入居者の希望で月1~2回朝食を洋食メニューにしたり、毎月1日・15日にはご当地メニューや行事メニューが献立に組み込まれており、その様子を写真掲示してご家族に紹介している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	外部発注にて栄養バランスが取れた食事を提供している。食べれない食材等の献立の際は、予め代替食に切替えて提供している。状態の変化によって摂取量が減った方に対しては、補助食やソフト食を提供する事で栄養状態が保たれている。水分に関しては個々の状態に合わせた摂取量を決め、確実に摂ってもらうよう支援している。	水分量に関しては飲水量を決めて提供しチェックしている。しかし、お茶を好まない方もいらっしゃるのでご家族に相談しジュースやコーヒーなど持参してもらい提供している。 食事に関しては外部発注しており、栄養バランスのとれた食事を提供できているが、好みで残す方がいて代替食を提供するなど、1人1人に合わせて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを行い、口の中の清潔に努めている。自分で義歯の洗浄ができる方でも不十分な面もある為、職員が適宜洗浄や義歯や口腔内の状態確認も行っている。また、往診やかかりつけの歯科受診など必要な時は本人やご家族と相談し調整している。	起床時・毎食後の口腔ケアは洗面台に誘導して個々に対応している。ベッド上で過ごす方は、口腔内が汚れていたり乾燥している時は、スポンジ棒で湿らせたり清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	主に起床後・毎食前後・就寝前を基本に声掛けをしてトイレ誘導しているが、本人の訴えやトイレのサインなど見逃さず、1人1人の状態に応じて対応している。また、夜間の排尿量に応じて尿取りパッドの種類等をご家族と検討をし、失敗を防いで安眠に繋がれたり個々の状態に合わせて対応している。	個々の状態やその時の状況に応じて、トイレ誘導やパット交換を実施。リハビリパンツやパットは入居者それぞれに合った物を検討。夜間はベッドサイドにポータブル便器を設置したり、パット交換する方は、尿吸収の良いものを活用する事で眠りを阻害しないよう配慮している。	各入居者の排泄パターンを把握し、個別の排泄支援に努めている。パッドの使用については吸水量やサイズ等について業者に相談し、家族の金銭的負担を考慮した上で入居者の排泄状況に応じたものを使用している。夜間は居室にポータブルトイレを設置し使用する等、個別の自立に向けた支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	1日1回体操を行い全身調整を図ったり、提供した食事と水分はきちんと摂取して頂けるよう心掛けている。個々の食事摂取及び排泄状況を日々把握し、下剤の調整など看護師と確認をしながら便秘解消に努めている。	水分に関しては毎食事、10時、15時を基本に、できる限り飲み干して頂けるよう声掛けしている。 日課としてYouTubeの高齢者向けの各種運動(体操)の動画を観ながら体を動かし、便秘改善に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	男性職員の介助が難しい方は女性職員が対応している。個別で入浴日が解るよう自室のカレンダーに記している。入浴を促しても体調や気分が乗らない時は、無理をせず時間をずらしたり別日に変更するなど、個々の状態に合わせて柔軟に対応している。	定期的に銭湯気分を味わえるようにと、入浴剤を使ったり、BGMを流していつもと違う雰囲気を入居者と職員が楽しみながら入浴支援をしている。ベッド上で代替入浴を実施する際は、洗髪用ケリーパットを使って介助を行うなど、個々に沿った支援ができています。	毎日、入浴できる準備を整え、入居者1人あたり週2回を基本に支援している。10月10日を銭湯の日として浴室前に看板を立て、「いい湯だな」の曲を流しながら、入居者に「ようこそグループホームひろたの湯へ」と呼びかけ、有馬の湯、別府の湯といった好みの入浴剤を使用し、入居者が楽しめる支援を行っている。ゆずや菖蒲を使用した季節を味わえる入浴も入居者の楽しみとなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食事時間を軸に、日々同じリズムで提供し夜間の安眠に繋げているが高齢でもあり、その日の体調に合わせて休息や午睡を促し個々に合った生活リズムを整えている。	個々の状態に合わせて休息の時間や午睡の時間を作り、日中は可能であれば積極的に体を動かす時間を取り入れ、夜間の安眠に繋げるようにしている。 入眠しやすいよう、事前に室温の調整や清掃・リネン交換など環境を整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎食前に入居者9名分をまとめた薬紙ファイルで確認しながら、内容や容量など間違いがないか職員2名で確認している。基本、看護師が薬の調整など管理し、変更等の際は申し合わせしている。 薬剤を潰したり、別皿に移して少量のご飯と一緒に服用する等、その方に合わせた服薬方法を心掛けている。	当事業所の看護師の管理の下、服薬介助は職員が行う。体調変化があれば看護師を通じて主治医に上申し、薬の検討をしてもらうなど調整している。服薬方法も複数回に分けて服用してもらったり、簡易懸濁法での服用に関しては薬剤師に指導してもらい、注意事項等をファイルにまとめ、常時確認ができるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴やその日の体調や気分を考慮しながら、負担とならない範囲で本人に合った役割や作業を職員と一緒にやることで、個性を活かせる場面を心がけている。また毎月企画する行事を通して、生活の中に楽しみを持って頂けるように支援している。	毎月フロア会議で「お楽しみ会」を企画し、予定表に掲示して入居者だけでなく職員も一緒に楽しみながら実施している。また、ご家族と外に出掛けられる機会も増えてきている。日常生活の中でも1人1人に合った作業やレクリエーションを促し、役割を持って取り組んで頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況(ユニット名:2Fユニット)	実践状況(ユニット名:3Fユニット)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染が5類になって以降、ドライブや散歩など計画を立て約3年ぶりの外出支援を行い喜ばれた。自宅への外出や外泊も行っているが、感染状況に応じ、主治医の判断のもとで制限をかけることもある。その際にご家族にも説明し了承を得ている。	コロナ禍で3年近くは外出の機会も少なく制限されている事も多かったが、5類になってからは外に出る機会も増えてきた。 ご家族からも「近隣を散歩させたい」という要望が出てきている。	コロナが5類になった以降は徐々に入居者の外出支援を再開している。ホーム周辺を散歩したり、歩いて行ける早岐茶市に行くなど、少しずつ入居者が外へ出かける機会が増えてきた。年末年始にかけて2泊3日で自宅へ帰る予定の入居者家族に自宅内の段差について注意事項を伝える等、以前のように外出する機会を増やす計画を立てている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者個々の預かり金を施設で管理しており、残高が少なくなるとご家族に依頼し、入金時に個人出納帳で確認の上で署名をもらっている。現在のところ直接入居者がお金を取り扱う場面はない。	コロナ禍で買い物に行けず、直接お金を使う機会もほぼなかったが、今後は戸外に出る機会も増えてくると思われるので、意向等も確認しながら買い物の企画も考えていきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話をお持ちの方で、通話が聞こえづらい時は職員が代弁したり、ご家族に電話を掛けたい方には、職員が予めご家族に要望など伝え本人に代わっている。また、椅子を準備してゆっくりお話ができるようにしている。	携帯電話を持っている方が2名いらっしゃって、ご家族や親戚・友人から電話がかかってきたり、事業所に直接電話を掛けて本人と話される事もある。娘さんが手紙を書かれご家族が事業所に持参されたケースもある。入居者からの発信で、ご家族や友人へ暑中見舞いや年賀状を作成して渡す企画も実施した。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアや脱衣室の照明をLEDに変更した事で、以前より明るい空間になった。現在も食卓の位置は対面を避けるようなレイアウトで、毎食後テーブルなどの消毒や室内の換気もこまめに行い感染対策を徹底している。また、フロアの壁面に季節ごとの貼り絵や行事ごとの写真を掲示して、四季を感じて頂けるよう工夫している。	毎月、共有スペースのフロアの壁面を変えたり、季節の花や植物を飾ったりと季節を感じてもらえるように工夫をして、楽しく安心して過ごせる空間を作り出している。 空調も直接当たらないように布を用いて風よけを作ったり、家具なども入居者の動線に合わせて邪魔にならないように配置している。	共有スペースは広く開放的なフロアで入居者は穏やかに過ごされている。壁面には入居者と職員が共に作成した季節ごとの作品が貼ってあり、明るい雰囲気広がっている。入居者の見当識に配慮し、どの位置にいても確認できるように時計やカレンダーを3か所設置している。定期的に要所の清掃や換気により清潔な共有空間を保っている。	